

# 視覚障害教育概論におけるアイマスク体験の実践

## 視覚障害児への適切な支援を自ら考える教師を育成するために

太田 裕子      中野 亮介

### 1. はじめに

筆者は視覚障害教育概論を 2019 年から担当している。特別支援学校教員免許状の中でも、視覚障害特別支援学校の教員免許状が取得できる大学は全国でも数少なく、多くの大学では視覚障害教育は概論 1 コマしか開講されないことが多い。しかし、視覚障害教育の歴史は長く、そこからは、他の障害にも役立つことが多くあり、将来特別支援教育を志す学生には、障害種別の枠を超えて、視覚障害教育からも多くのことを学んでほしいと願っている。

他の障害にも役立つことのひとつが「障害を疑似体験ができる」ことである。もちろん「疑似体験」なので、障害のある方々の思いのすべてを体験できるわけではない。しかし、自分の指導が、子どもの側からはどのように感じられているのかと教師が省察するきっかけを作るには、このアイマスク疑似体験は学生にも分かりやすく簡便で具体的な方法である。

ところが、このアイマスク体験にも課題がある。いきなりアイマスクをして短時間歩行しただけでは、多くの学生は怖い思いをするだけで終わってしまうのである。本来の疑似体験のねらいは、その状態に慣れて、視覚以外の感覚をどのように活用していくとよいか、どのような声掛けが有効か、児童にはどのような力を育成していけばよいかを、体験をもとに考えることにある。「視覚障害は恐ろしい。」にとどまらず、「見えなくても、こんなことも分かるのか」といった可能性を見つけていくことが大切であり、こうした体験は特別支援教育担当教師として指導法や教材教具の工夫改善の力を磨くことができる。

とは言え、限られた 15 回の講義の中で、学生に学ばせなければならない内容は、心理、生理、病理、教育と多岐にわたり、疑似体験に多くの時間を割くことは難しい。

そのような現状と課題の中で、今年度は、その疑似体験をより有効にすべく、短時間でも回数を多く導入した指導計画を作成した。そしてその指導計画による疑似体験の内容と成果を、学生の振り返りア

ンケートの結果から、考察した。なお、このアンケートは受講した全学生に、講義内容の改善を目指して研究として行うことを説明して依頼し、任意の提出で回収したものである。

### 2. 本実践の目的

本実践は、アイマスクによる全盲の疑似体験を 15 回の講義の中で短時間でも回数を多く継続して設定し、体験当初の「見えない」という恐怖を乗り越えて、視覚以外の感覚を活用する体験ができるようになるかを検証することが目的である。

### 3. 本実践の指導計画上の位置づけ

本実践を行った今年度の指導計画が下記の表 1 である。

表 1 令和 5 年度 視覚障害教育概論 指導計画

回	日	内容	アイマスク体験等
1	9月20日	オリエンテーション(視覚障害者のイラストレーター)	
2	9月27日	視覚障害教育の歴史 ヘレン・ケラーとアニー・サリバンから学ぶ	
3	10月4日	視覚障害児と学びの場	
4	10月11日	視覚の成り立ち 視覚器の構造や視機能評価	○
5	10月18日	視覚障害乳幼児の発達と支援	○
6	10月25日	盲児の指導 ・触覚など、視覚以外の感覚の活用	○
7	11月1日	盲児の指導 ・ルイ・ブライウの生涯と点字のもつ意味(点字の体験)	○
8	11月8日	盲児の指導 ・点字の読み書きの指導	○
9	11月15日	盲児の自立活動の指導(歩行指導の疑似体験)	○
10	11月22日	盲児の自立活動の指導(空間の把握と歩行)	○
11	11月29日	弱視児の学習・生活上の困難と自立活動の指導	(弱視用アイマスク)
12	12月6日	視覚障害特別支援学校の教育課程と教科の指導	
13	12月13日	視覚障害児のインクルーシブ教育	
14	1月10日	障害当事者からのメッセージ(ゲストティーチャー)	(ゲストティーチャー)
15	1月17日	まとめとテスト	

今年度の指導計画の特色は、早い段階からアイマスク体験を導入したことである。表にあるように、15 回中 7 回、4 回目から毎週継続してアイマスク体験を行ったことである。昨年度までは、盲児の指導に関する 3 回(6,7,8 回目)であった。

具体的な疑似体験の内容は、次頁の表 2 のとおり

である。歩行指導の疑似体験は1コマ90分をすべて疑似体験に使ったが、あとの回は、10分程度でできるゲームなども取り入れて、学生がリラックスしアイマスクの状態に慣れるように心がけた。

表2 アイマスク体験で行った疑似体験の内容

視覚器の構造や視機能評価	様々なシミュレーションゴーグルを体験した後にアイマスクを使用する。
視覚障害乳幼児の発達	全盲の乳幼児の視覚の無い世界をアイマスクで体感する。
触覚の活用	アイマスクをして、いろいろなものを触覚で推測するゲームを行う。
点字打ちの体験	点字をアイマスクをし、触覚で確認する。
点字の読み書きの指導	盲児役と教師役になり、点字カードを使って点字読みの指導を行う。
歩行指導の疑似体験	2人一組で歩行体験。音源歩行、介添え歩行、階段歩行などを体験する。
空間の把握	盲児役と教師役で折り紙指導の体験をする。
家庭での課題として、アイマスクで食事・飲み物の体験をする。	

#### 4. 学生の反応

学生の反応は毎回のワークシートでも、視覚の無い状態に対する恐怖心が薄れ、ポジティブな気持ちで疑似体験に望む様子がよみ取れたが、ここでは、15回目の授業で全員に取ったアンケートから、疑似体験への学生の反応を集計した。対象の学生は37名。回答した学生は34名。回収率91.89%。

##### (1) アイマスク体験を過去に経験しているか。

表3 アイマスク体験の有無

過去にある	9	26.47%
初めて	25	73.53%
計	34	100%

アイマスク体験は3/4の学生が初めてだった。今年度は、学期を通して何回も使用するため、各自で個人用のアイマスクを準備させた。「アイマスク体験が過去にある」と答えた学生の中には、海外旅行等で使用したことを回答している学生がいた。アイマスク使用について、日常的になってきている傾向があると思われる。

##### (2) アイマスク体験の内容で印象に残った活動は何か。(複数回答可)

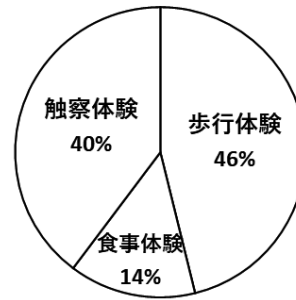


図1 アイマスク体験で印象に残った活動

学生が「印象に残った活動」として挙げたアイマスク体験の内容は、①歩行体験、②食事体験、③触察体験の3つに大きく分けられた。それぞれの内容について、学生の印象に残った体験をさらに具体的に集計した。また、印象に残った理由は、複数挙げた中で一番印象に残ったことのみ、記述させている。

##### ① 触察体験

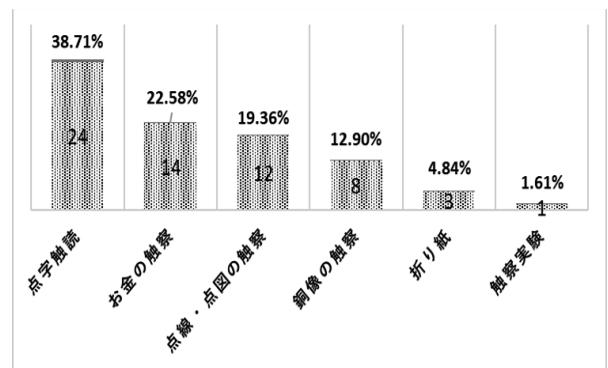


図2 触察体験で印象に残ったもの

コメントは、点字の触察(触読)に対しては全部で3件。「思ったより難しかった」(2件)と「触察してみて、楽しかった」(1件)があった。

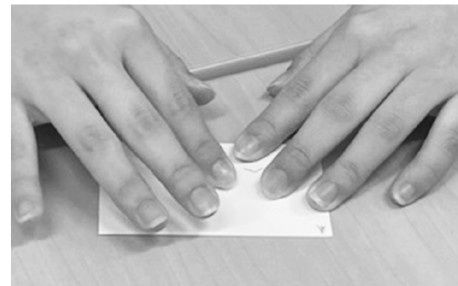


図3 点字を触読している様子

お金の触察に関しては2件。この体験は、買い

物場面を想定し、「アイマスクをして自分の財布からお金を出して支払う体験」をする、というものであった。コメントは2件あり、「お金を見分けることができず、悔しい思いをした」「お金を触察で確認する印が工夫されていることを初めて知った」である。

折り紙の体験のコメントは3件あり、いずれも「折り紙を教える側と教わる側で双方の体験ができた」「盲児に言葉で折り紙を教えることの難しさが体験できた」「盲児への声掛けの仕方が分かった」といった内容であった。



図4 盲児役と教師役で折り紙を折っている様子

最後に「触察の実験」についてのコメントが3件。これは「触察は生まれ持った原始的な感覚から、ものを認知するための探索的感覚に育てる必要がある」という講話内容の実験として行ったものである。実験は「アイマスクをして、何か分からないものを触って何か答える」というゲーム。触るものの中で、ねばねばした「ユニボウズ」というフィギュアを触った時に、クラス全体がとても沸き、その印象が残っていると思われる。3件とも「見えないもの、何か分からないものを触る怖さを体験した」という内容であった。

## ② 食事体験

表4 食事体験の具体的な内容

飲み物・食事体験	11	50%
味覚の実験	11	50%
計	22	100%

食事体験は授業内では行えないため、家庭で体験する課題として出した。

印象に残った体験として挙げられたのはアイマスク体験全体の14%であったが、学生が挙げた内容は2つである。「飲み物・食事体験」は、アイマスク体験を始めて2回目から3回目(指導計画5回目から6回目)にかけて出した各自が家庭で行う課題である。コメントは2件で、内容は「食事をするのは、思ったよりもずっと困難がある」「食事をするのはこんなに大変かと驚いた」であった。

また、「味覚の実験」とは、アイマスク体験3回目の中で、有志の学生に、「味覚が見た目に支配される」ことを体験する実験を指す。いろいろな味の個別包装された、形は同じチョコレートを、アイマスクをして自分で選び、食べて味を当てる実験を行った。「自分が思った味と異なる。包み紙を見ないと、味だけではわからなかった」というコメントがあった。

この体験を通じて、給食指導などの時に、メニューや食材のある場所などを丁寧に教え、ある程度予測した上で食べるように指導することが、安心して味を味わう楽しみにつながることで、学生には体験的に理解された。

## ③ 歩行体験

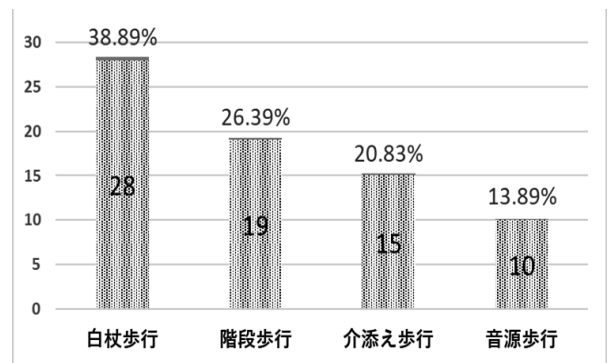


図5 歩行体験で印象に残った活動

歩行体験は、アイマスク体験全体の中でも46%と一番多かった。その中でも白杖歩行は38.89%と一番多かった。

歩行体験は2人一組になり、一人は教師役、一人はアイマスクをして盲児役となり、90分を通して、学内を、白杖歩行、介添え歩行、音源歩行の3つの歩行体験をする。途中では銅像などにも触りながら、最後に白杖歩行で階段を一人で上がる

経験をするというものである。



図6 2人一組で白杖歩行を体験している様子

それぞれの体験を教師役と盲児役で行うので、それぞれの役割を通して、言葉で伝えてほしいことはどんなことなのか、安心できる支援とはどのような支援なのかを学び合うことができる。

「白杖歩行」については、今年度はその前に、6週アイマスク体験を行ってきたことから、印象に残った理由として21件のコメントがあったが、「白杖を使ったことが無かったので、使ってみたかった。」「白杖歩行は初めてで、貴重な経験だった。」「どのようなことが困難なのかよくわかった。」「どのように他の五感を研ぎ澄ませているのか、肌で感じた」というように、興味関心をもって行ったコメントが19件もあった。「見えない世界で歩くことへの怖さが分かった」というように「怖さ」を挙げた学生は2件にとどまった。

しかし、「階段歩行」は「見えないとこんなにも上りにくく危険な事かと改めて実感した」というコメントが1件あった。

「音源歩行」は「最初はすごく怖かったが、人の声を信じて進むことができた。」と1件あった。

#### (4) アイマスク体験を始めた直後としばらく経験を積んだ後で、体験の印象は変わったか。

この設問は、視覚障害教育概論において、昨年度までは3回程度の疑似体験だったので、今年度は体験期間や回数を増やした。その成果を見るための質問である。アイマスク体験を初めて体験した時の印象と、継続してアイマスク体験をした後の印象につ

いて、自由記述で書いてもらった。

#### ① アイマスク体験当初の印象

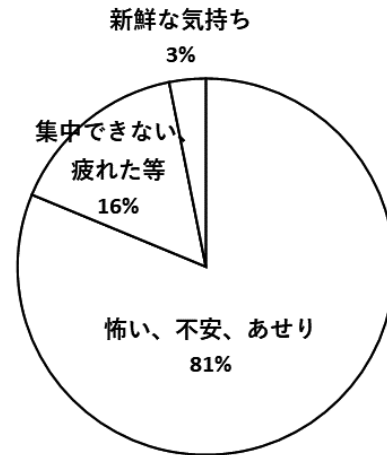


図7 アイマスク体験当初の印象

こちらの円グラフは、コメントを記入した32名からのコメントの集計である。81%の学生が、アイマスクをした時に不安や恐怖を感じている。

「集中できない」「疲れた」等のコメントも合わせると、97%の学生が、疑似体験当初はマイナスの感情を持っていることが分かる。

#### ② アイマスク体験を積んだ後の印象

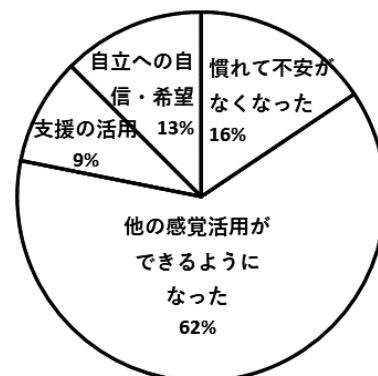


図8 アイマスク体験を積んだ後の印象

こちらの結果では、全員がポジティブな印象に変わっている。

その内訳をみると、「アイマスクに慣れた」というコメントは16%であるが、他のコメントは、慣れただけでなく、視覚障害教育で必要な、他の感覚機能とはどのような感覚なのか、また、他の感覚はどのようにして研ぎ澄まされ、どのように活用していくのかについて、学生自らがしっかりと体得したこと

が分かる。学生が書いたコメントをもう少し詳しく次の表5に示す。

表5 アイマスク体験を積んだ後の印象の詳細

慣れて不安が無くなった	5
他の感覚を使うようになった	7
どこに触ればよいか分かるようになった	1
感覚が鋭くなってきた	11
自分の中で地図を作れるようになった	1
声掛けを頼ればよい	3
何とか生活できる	3
楽しめることがある	1

まず「慣れ」について、コメントでは「長くつけていると慣れ、不安が少しずつ無くなった」「(当初はすぐにアイマスクを外したいと思ったが、)アイマスクを外したいと思わなくなった」等と表現されていた。

「他の感覚を使うようになった」という項目では、「耳を澄ませば、人の気配など、分かるようになってきた。」「自分から手で触って確認するようになった」「触覚などの感覚に集中できるようになった」等と表現している。特に11名の学生は、この疑似体験を通して「自分の感覚が鋭くなってきた」と表現している。特に「どこに触ればよいか分かるようになった」というコメントにもあるように、学生自らがこの疑似体験を通して触察力を高めていったことが分かる。さらに「自分の中で地図を作れるようになった」というコメントからは、本学生が、体験を通してメンタルマップを作成できるようになったことであり、歩行指導の重要な内容を体験的に獲得できたということが分かる。

こうした、自立活動の「環境の把握」の内容を疑似体験で体得できたということは、今後特別支援学校の教員として自立活動の指導を行う時にも、大変役立つ学びであったのではないかと考える。

さらに、「支援の活用」では、盲児役と教師役と2人一組で疑似体験を進めてきたことにより、それぞれの経験を生かして支援の活用の仕方も学んだことになる。

また、「自立への希望・自信」では、「(自分が視覚障害者になっても)何とか生活できるという自信がついた」「(視覚障害者になっても)できないことはほ

とんど無い、と思うようになった」「(視覚障害でも)楽しめることがある」というコメントがあり、学生が疑似体験を通して、視覚障害を受容し、視覚障害の状態をポジティブに捉えることができるようになったことが示された。

(5)視覚障害当事者の話を聞いたことで、初めて知ったことは何か。また、視覚障害に対するイメージがどのように変わったか。(複数回答)

視覚障害教育概論での疑似体験に関わる実践は以上で終了したが、最終回に、視覚障害当事者による講演を行い、そこで学んだことについても質問をしたので、その内容についても記す。

ゲストティーチャーとして招いたのは、共同研究者の中野亮介氏である。中野氏は、埼玉県立視覚障害特別支援学校塙保己一学園で、全盲の理療科教員として勤務している。講演では、視覚障害特別支援学校の様子と自身の日常生活について、パワーポイント資料と視覚障害者用の機器やスマートフォンなどの機器を実際に使いながらプレゼンテーションを行った。



図9 視覚障害者用の機器を実際に使いながらプレゼンテーションしている様子

アンケートの内容をまとめたものが表6である。34名の学生から複数回答可で41の「初めて知った」事柄や印象が挙げられた。

この中には中野氏個人の印象となっているものもあるようだが、視覚障害当事者である中野氏との出会いの前に学生たちが持っていた視覚障害者に対するイメージと異なったことの現れである。

この講義の疑似体験を通して、最終のアンケート

には「できないことはほとんどない」というコメントまで書いた学生たちだが、実際に、全盲で教員という職業に就き、スマホやパソコンを使い、自立した生活している中野氏と出会い、「初めて知ったこと」について挙げたのが下記の内容である。

表 6 当事者の講話を聴いて初めて知ったこと

スマホ、パソコンなどが使える	10	24.39%
見える人のように明るく楽しそう	9	21.95%
何でもできる、障害のない人と同じ生活ができる。	8	19.51%
視覚障害でも教員になれる	7	17.07%
バスや電車を使って一人で行動できる	4	9.76%
マッサージの授業がある	1	2.44%
職業自立ができる	1	2.44%
挑戦することを大切にしている	1	2.44%
計	41	100.00%

ここに上げられた内容の多く(スマホやパソコンの活用、理療科の教育内容、職業自立や生活自立の様子等)は、どれも講義の中で動画や資料として触れたことだが、学生は実際に当事者と出会ったことで「初めて知った」と挙げている。講義や動画を通しての認識と、直接の出会いでの認識の深さの違いが表れているとも解釈できる。

## 5. 考察

今回の実践を学生からのアンケートを通して振り返り考察したことを、今後の講義をより充実させるための視点として、下記の4点にまとめた。

### (1) アイマスクに慣れるための期間の必要性

アイマスクによる視覚障害の疑似体験は障害理解教育などの場面でも多く活用されてきた方法である。筆者も視覚障害関係の講義の中では、何回か行ってきた。その中で、アイマスクをいやがる学生、怖いと言ってすぐ外してしまう学生がいることについて、いつも課題に思ってきた。

今回はまず、このアンケートを通して、「アイマスク体験そのもの」に恐怖をもつ学生が81%と非常に多いことを再認識した。今まで、アイマスクを嫌がる学生は少数の特別な配慮が必要な学生と理解していたが、実は81%という多くの学生たちが、態度や

言葉で恐怖感や拒否感を表さなくとも、そのような感情を持っていたことが分かったのである。たとえ疑似体験であっても、急に視覚を失うことは恐怖であり不安である。学生たちのその感情は認めたくえで、アイマスク体験に入る必要がある。

しかし、視覚障害の児童生徒にどのような働きかけをし、支援をし、指導をして行くのがよいのか、それをPDCAで改善していくためには、障害当事者の疑似体験が有効である。恐れずに疑似体験を受容し、主体的に疑似体験で活動させるレディネス期間として、身近な短時間の体験から始めるなど、アイマスクに慣れる目的の体験が必要であることが分かった。

### (2) アイマスクに慣れるための、日常生活での疑似体験の工夫

今回は、アイマスクに慣れる段階では、お菓子を食べる、飲み物を食べる、食事をする、財布からお金を出すなど、日常生活のちょっとした体験を、触察のクイズなどゲーム感覚で行ってみた。日常生活はアイマスクをしても、状況を思い描くことができ、今までの生活経験と結びつけたり、新たな発見があったりした。学生にとっては恐怖心が少なく、かつ、楽しく体験できた様子が、ワークシートやアンケートのコメントから伺えた。

疑似体験というと、歩行や点字の体験が多いが、日常生活の疑似体験は、視経験と聴覚や触覚からの情報との結び付けやすく、他の感覚を有効に活用するための指導に良いヒントを与える。また、視覚障害があってもできる楽しいゲームや遊びの体験は、今後の特別支援学校での学級経営などでも役立つ経験である。

### (3) 2人一組の疑似体験

アイマスク体験は、2人一組で、一人が盲児役、一人が教師役として安全管理も行うことを原則として行ってきた。この形が、触察や歩行指導に発展し自立活動の指導の模擬授業となったり、国語の点字の学習の模擬授業となったりした。

講義でも、視覚障害児の指導上の留意点は説明したが、実際に盲児役になるとその重要性を体験的に気付くことができたワークシートの感想にも多くあった。2人一組の形態が教師としての気付きや指導力・実践力の育成につながった。

#### (4)視覚障害者との出会い

毎年この講義では、視覚障害教育のまとめとして、県内の視覚障害特別支援学校の教員の中野氏にゲストティーチャーとして学生に講義を依頼している。講演の内容は、例年は手紙形式で振り返るが、今回はアンケート形式で振り返ったので、学生が感じた印象が言葉で鮮明に捉えることができた。

その詳細は表 6 のとおりだが、全体を概観して、視覚障害に対しては「できない」「困難」「暗い」といった印象が強いことが分かった。それを「なんでもできる。障害の無い人と同じ生活ができる。」と言えるようになるには、当事者の出会いが必要なかもしれない。

学生達はこれから、特別支援学校の教員を目指して学んでいく。それには、教育理論や疑似体験だけでなく、視覚障害当事者との出会いから学ぶことが必要であり、そうした当事者との出会いも、教員養成課程の中で設定していく必要がある。

#### 主な参考文献

- ・文部科学省(2017)「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領」(海文堂)
- ・青柳まゆみ・鳥山由子(2021)「新・視覚障害教育入門」(ジアース教育新書)
- ・太田裕子・中野亮介(2022)「特別支援教育を志す学生に対する体験学習の実践－視覚障害の疑似体験と障害当事者との交流体験の試み－」(十文字学園女子大学「児童教育実践研究第15巻1号」)
- ・広瀬浩二郎「さわっておどろく」小学校国語教科書4年下(学校図書)
- ・氏間和仁(2013)「見えにくい子どもへのサポートQ&A」(読書工房)
- ・香川邦生・猪平真理他(2016)「視覚障害教育に携わる方のために」(慶応義塾大学出版会)
- ・猪平真理(2018)「視覚障害のある乳幼児の育ちを支える」(慶応義塾大学出版会)
- ・五十嵐信敬(1993)視覚障害児の発達と指導(コレール社)